

逆転の発想から 生まれた和紙糸

繊維産業が衰退する中で、六年半にわたる苦闘の末、和紙を糸に加工する技術に成功したのが備後燃糸だ。同社では和紙で加工した糸を使いジーンズ生地やバッグ、タオルなどの製品化を進めている。紙は水に弱いという常識を覆す発想から生まれた和紙糸は、綿糸に比べ約三割軽いうえ、吸収性、通気性、保温性、肌触り、さらには環境の面でも優れていることなどから、苦境にある繊維業界で久方ぶりの明るい話題として注目を集めている。

水に浸した和紙を燃る 「水燃り製法」を開発

繊維業界は三年ぐらいいの間で、好況の繰り返しが続いていましたので、バブルがはじけ、不況に入ってもいざ良くなるかと高をくくっていました。しかし、三年経っても五年経っても一向に良くなる気配がありません。ピーク時には四億円あった売上が、半分になってしまったのです。そこで、「何か新しい製品を開発しないと大変なことになる」という思いで、和紙を原料にした糸の開発に着手したのです。以前、和紙をこより程度の簡単な燃り方

オンリーワン 企業めざして

備後燃糸
(広島県福山市)
光成 猛 社長



ジナル製品も製作。東京、京都、大阪、岡山、九州で展示会を開催、大変好評を得て、さらなる製品開発をめざしている。現在はデニムメーカー、帆布メーカーなどに生地を供給するとともに、デザイナーと共同で、自社ブランドのバッグやショールなども製作している。

燃糸の仕事は、メーカーや商社の注文を受けての仕事で、受注生産がほとんどです。いわば受け身の商売だったんですね。糸だけでなく、生地や製品を生産することで、自分で価格を決められる仕事ができるようになります。

で糸にして、その糸でつくられたバッグを見たことがあったのと、手提げ紙袋の取っ手の注文を受けたことがあったことがきっかけでした。

機械を使い本格的な和紙糸をつくらうと始めたものの、弱い紙を糸に加工するのはそんなに簡単ではありませんでした。燃しても燃しても切れてしまいう。工場にこもって毎日毎日和紙を燃り続けました。蠟ろうを使ったり、スプレーで水をかけたりし、いろいろなことを試みましたが、なかなかうまくいきません。諦めかけていましたが、開発を始めて二年が経過したあるときふと浮かんだのが、和紙に水を含ませて燃る「水燃り製法」だったのです。紙は水に弱いという先入観を捨てた逆転の発想だったのです。

和紙を数時間水に浸し、自分で改良した燃糸機で燃って糸に仕上げました。濡れた紙を燃るわけですから、よく切れましたが、非常にきれいに燃ることができました。燃る速さや回数を換え、何度も何度も繰り返しうちに、丈夫で、均一な表面が丸いきれいな糸ができたのです。この技術は、地元同業者の川崎燃糸と共同開発した「水燃り製法」として、特許を取得しました。最初は手提げ袋の取っ手から始め、強さや滑らかさなど徐々に改良し、タオルやジーンズ生地、バッグ、ショールなどに拡大していきました。

亡くなったため、社長に就任した。いとこの光成一志前社長が日本燃糸工業組合の理事長をしており、視察団を連れて欧州に行くので、その間の留守を頼まれました。しかし、視察から帰ると「このままここに残れ」といわれ、入社したのです。

技術を担当していましたので、燃糸ぐらいは簡単だと思って入社したのですが、簡単にはいきません。糸の種類が多く、糸の性質に合わせて燃らなければならぬからです。また、湿度や湿度によっても燃り方が微妙に変わってくるのです。あつという間に一〇年が過ぎてしまいました。一〇年経つと一通り経験しますから、一応の技術を覚えることができました。

前社長が病で倒れたときに、いずれ後を継がなくてはと思っていました。社長に就任し、責任の重さを痛感しました。まず手がけたのはチェック体制を強化し、品質管理に力を注ぐことでした。自分で取引先を回り、お客さんに要望を直接聞き、製品づくりに生かしました。クレームも私が直接お客さんのところに向いて処理をしました。最初はよくお客さんに叱られるも、しかしながら、誠実な対応をすることで、新たな商売につながったことも多くありました。

福山市言田町は備後かすりの町として栄えたが、現在は緋を製造する

糸の強度をさらに高め、 ジーンズ生地を燃る

この地で五〇年以上にわたり、繊維関係の仕事に携わってきた福山あしな商工会の三好勇会長も「画期的な技術」と絶賛する。光成社長は、さっそく繊維メーカーや商社に和紙糸を持ち込んだものの、反応はいまひとつ。そこで、さらに糸の強度を高め、地元のデニムメーカーと共同でジーンズ生地の開発に乗り出す。

開発した糸を持って、アパレルメーカーや商社に営業に行ったのですが、皆さん「いいものができたね」とは言ってくれるのですが、なかなか買ってはくれません。そこで、ジーンズ生地の開発を試みました。機屋さんで織る技術を一緒に研究し、ジーンズ生地をつくりました。

ただ、ジーンズ生地は丈夫でなければいけませんから、さらに強い糸が必要でした。地元のデニムメーカーに生地を織っていただき、さらに強度を高める研究をしました。燃糸機の最適な回転速度や張力、水の配合率試験を繰り返し、ようやく強く、滑らかな和紙糸をつくることができました。

糸だけでなく、和紙糸を使った生地で京都の染色デザイナー塩谷栄一先生のデザインにより、バッグやショールなどの備後燃糸のオリところ。近隣の町を含めてわずか三社。ピーク時に三〇〇社あった燃糸業者も現在は二〇数社だけだ。備後燃糸も、売上はピーク時の半分に減少。厳しい環境の中で生き残りの道を模索し、新技術の開発に取り組んできた備後燃糸。「水燃り製法」という新たな技術の開発で、その道が見えてきたようだ。

繊維不況が続く中で、何かが必要だったので、その何かがなかなか見つかりませんでした。何度も何度も開発をやめようと思いましたが、「なぜ成る なさねば成らぬ何事も」が私の好きな言葉です。この言葉を信じて諦めないで、六年半開発を続けました。

これまでも、いろいろ難しい糸の注文がありました。断ったことはありません。諦めずに努力すれば何事もできないことはありません。ものづくりは、諦めないで努力すれば、必ず何かかなるんですね。



和紙糸を使って
製造したジーパン